「免許状（相撲世話人の事）」（河野家文書〈山口市〉586）

➤13

たたかう④

幕末の諸隊力士隊と山分勝五郎（4）
～力士隊士たちの明治～

《石見占領地と勇力隊》

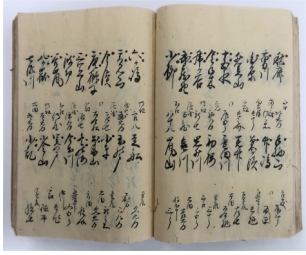
幕長戦争後、長州藩は石見国浜田藩領、石見銀山領（幕府領）を占領します。勇力隊は占領軍の一隊として石見に派遣されました。この時の動きとして、慶応3年(1867)10月、山分勝五郎が銀山領子地浦で相撲興行を計画していたこと（『維新6』744～745頁）、明治元年(1868)5月、勇力隊が石見銀山領の口留番所（島津屋口・九日市口）で番兵を務めていたこと（『維新6』846頁）が知られます。後方任務ですが、元力士たちで構成される隊の存在は、占領地のひとびとを威圧し、占領地を治める上で効果的であったでしょう。

《盟友菊ヶ濱亀吉、大阪へ帰る》

明治2年(1869)2月、勇力隊士であった菊ヶ濱亀吉ほか6名が、当時隊を管轄していた振武隊に対し、相撲稽古のため大阪に行きたいと願書を提出しています。亀吉は勝五郎とともに力士隊結成時の初期メンバー。禁門の変、元治の内戦などいくつもの戦場を経験してきた歴戦の勇士です。願書では「相撲稽古」のためとありますが、実質除隊願です。

幕府倒壊、維新政権樹立、大村益次郎による近代軍制整備と時代はめまぐるしく変動していきます。亀吉は、自分のような元相撲取が兵士として活躍する場はもうない。ふたたび相撲取として生計を立てようか、と見切りをつけたのかもしれません（戦さはもういやだ、という思いもあったでしょう）。幾人もの仲間も失いました。願いは聞き届けられています（『維新6』878～879頁）。

この年の6月、大阪に行った隊士のうち4名が、山口への帰国を願い出ています。しかし、そこに菊ヶ濱亀吉の名はありません（『維新6』893～894頁）。



「密局日乗」（毛利家文庫19日記18）にみえる萩での相撲興行

萩藩密用方の日記「密局日乗」にも、萩で行われた相撲の記事がみえます。寛政8年(1876)8月10日条には、防長両国から集まった力士により相撲が催され、その勝負付（取組結果）が掲載されています。子ども相撲（「児相撲」）に関する記述もあります。なお、萩での相撲については、田中助一「萩の大相撲史」（『史都萩』第42号）が参考になります。

《明治期の山分勝五郎》

当館蔵の河野家文書には、明治前期、県内での相撲興行に関する資料が含まれています（シート21）。その中に「山分勝五郎」の名をみることができます。

明治7年2月、「阿武勝五郎」なる人物が、山口住人の熊ヶ嶽安五郎に対し、相撲の興行主に加えることを認める免許状を与えています。「阿武勝五郎」の肩書には「山分改」とあり、彼がもともと「山分勝五郎」を名乗っていたことがわかります。しこ名は継がれる例もあるので断言はできませんが、彼が力士隊の頭取・山分勝五郎その人であった可能性は高いでしょう。江戸の相撲取から長州藩の諸隊・力士隊の頭取となり、数々の戦場を経験、高杉晋作や伊藤博文とも接点のあった勝五郎。最後に属した勇力隊を除隊後、明治前期には山口で相撲の興行主として活躍したようです（森昌幸「明治初期の相撲の免許状」『喜和』108号にも、明治8年の阿武勝五郎の免許状が紹介されています）。

元治の内戦時、そのまま諸隊側についていれば、あるいは伊藤とも接点を持ち続け、また違った人生が開けていたかもしれません。明治期、勝五郎の胸中にはどんな思いがあったでしょうか。

《萩・金谷神社の相撲番付額》

萩市の金谷神社に明治10年に奉納された相撲番付額（105×93㎝）があります。大阪相撲の興行が行われ、奉納されたものです。かすれた文字の中に、「前頭　菊ヶ浜亀吉」と「頭取　山分勝五郎」の名があります！大阪に戻った菊ヶ濱亀吉はふたたび相撲取となり、興行のため萩に来ていたのです。勝五郎も興行主の一人として加わりました。亀吉と勝五郎の動向を物語る貴重な文化財です（田中助一氏の研究によると明治5年にも萩に来ています）。

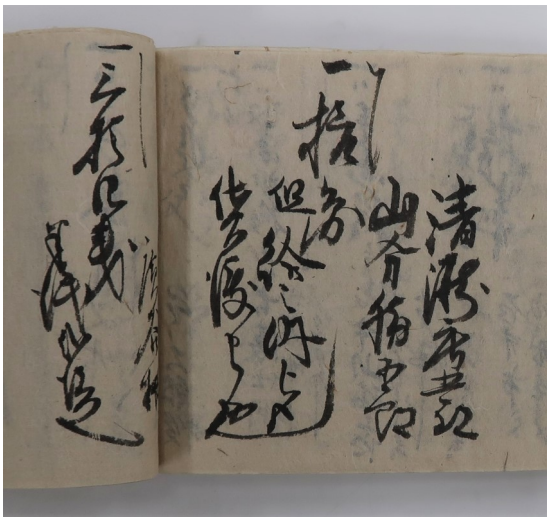
免許

一其許儀相撲執心ニ付是迄致
出情候間、此度相改我等門弟差加
相撲致世話人置候処実正也、然上者
相撲作法相心得世話等可致者也、依而
免状如件

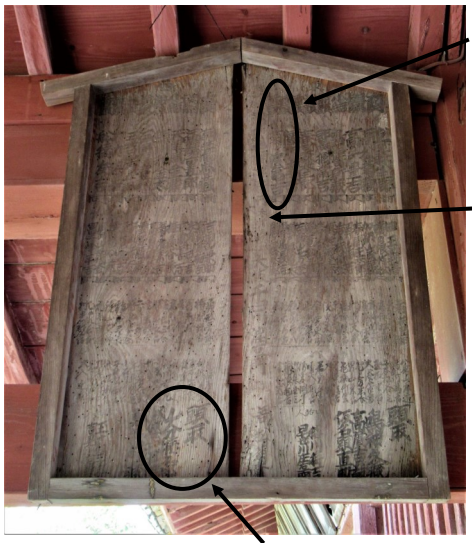
明治七戌二月　　山分改
阿武勝五郎　印
源常成

山口住人
熊ヶ嶽安五郎殿

免許状（相撲世話人の事）
＊シート冒頭写真の釈文



明治16年「諸買物控帳」（河野家文書）にも「山分勝五郎」の名前が見えます。「拾円　但、給（給金）之内として貸渡申候也」とあります。



萩・金谷神社と相撲番付額